

サツキ 晴れ

Satsuki bare



院長
メッセージ

急な病気やけがの治療を終えたあと、「安心して家に帰れるだろうか」と不安を抱える方は少なくありません。みよし市民病院では、医師や看護師、リハビリスタッフなど多くの職種が力を合わせ、退院後の生活までしっかり支えています。本特集では、患者さんとご家族に寄り添う当院の取り組みをご紹介します。

SPECIAL REPORT

「この病院があってよかった」
その信頼に応え続ける。

つなぐ医療 特集

CONTENTS

- 01 Cure 病気のおはなし
- 02 Cure リハビリテーションのおはなし
- 03 地域医療を知ろう
- 04 連携病院・診療所紹介
- 05 TOPICS
- 06 INFORMATION

2026 No. 19

06

INFORMATION

みよし市の公式LINEアカウントで健康・医療情報を配信中!

みよし市の公式LINEアカウントでは、市民病院からの健康講座や各種イベント、医療情報などを随時お届けしています。ぜひ「友だち登録」をして、身近な医療・健康情報をチェックしてください！



友だち登録は
こちらから!
QRコードまたは
LINEのホーム画面で
「みよし市」を検索!



成瀬医師がサンライブで出張講座を開催!

人生100年時代を迎え、年を重ねることどう向き合っていくかは、多くの方にとって身近なテーマです。2026年2月6日（金）、みよし市図書館学習交流プラザ「サンライブ」にて、当院事業管理者の成瀬達医師による出張講座「良い年の取り方」を開催します。老いを否定するのではなく、日々を健やかに過ごすための考え方やヒントを、医師の視点からわかりやすくお話しします。ぜひご参加ください。

テーマ 良い年の取り方 人生100年時代、老いと上手く向き合う方法を考えましょう
日時 2026年2月6日(金)14:00～15:00
講師 みよし市民病院 事業管理者 成瀬 達 医師
会場 みよし市図書館学習交流プラザ「サンライブ」2階
研修室 兼 軽運動室
定員 先着80名(参加無料) 持ち物 上履き(※土足禁止)
申込方法
(以下のいずれかの方法でお申し込みください)
①みよし市民病院 管理課へ電話
(0561-33-3300)
②みよし市民病院 内科外来で直接申込
③当院ホームページ内のメールフォーム



みよし市民病院の理念 みよし市を愛し、みよし市民の健康に寄与することを誓います。

- 基本方針**
- 1 患者さんの尊厳を重視し、公正な医療を行います。
 - 2 思いやりと、心のふれあいを大切にした医療を行います。
 - 3 常に医療の進歩に目を向け、質の向上に努めます。
 - 4 市民の皆さんに信頼される医療を行います。
 - 5 地域医療の向上を目指し、保健・福祉との連携を図ります。



みよし市民病院公式ホームページ

みよし市民病院の公式ホームページでは、診療案内や外来情報、各種お知らせを掲載しています。
ぜひご活用ください。

みよし市民病院 検索 <https://hospital-miyoshi.jp/>



みよし市民病院
Miyoshi Municipal Hospital

〒470-0224 愛知県みよし市三好町八和田山15番地
TEL 0561-33-3300
<https://www.hospital-miyoshi.jp/>

サツキ
Satsuki bare 晴れ

発行責任者／院長 伊藤 治
発行／みよし市民病院 広報グループ
記事提供・編集協力／株式会社エヌ・エフ・ユー
発行日／2026年1月



※写真は取材時の状況を再現したイメージです。

BACK STAGE

高度急性期医療の先に
必要な、生活に戻るための
医療拠点。

- 多くの人にとって〈病院=治療を行う場所〉という認識は自然なものだ。しかし、超高齢社会となつた今、病院には〈治療をする場所〉であると同時に、〈在宅復帰を支える場所〉としての役割が強く求められている。

- みよし市民病院はその役割をしっかりと自覚し、限られた制度や時間のなかで、「途切れることなく在宅までの道筋を支える医療拠点」としての機能の強化に取り組んでいる。



早期にみよし市民病院への転院が決まつたことを、家族は「通い慣れた市民病院でリハビリが受けられると聞いて、本人も私たちも本当に安心しました」と振り返る。近年は急性期病院の入院期間が短く、手術後はできる限り早く退院するのが一般的になっている。そのため、患者側では退院後の受け入れ先が見つからず困るケースも少なくない。「高度急性期病院の治療を終えた患者さんを受け入れ、在宅までの橋渡しをする」とは、当院の重要な役割だと考えています」。そう話すのは、医療ソーシャルワーカーの阿部優奈である。「Tさんの場合も、豊田厚生病院さんから連絡をいたしました。すぐに受け入れ準備を始めました。ご希望は自宅復帰と伺いましたので、その目標に向けて多職種で支援しています」。

生活面のリハビリを担当するのは、作業療法士の加藤美紗。「とくに力を入れているのがトイレ動作です。ご家族の介助を受けながらできるだけご自身で排泄できることを目指しています。栄養状態や身体状況をカルテで確認しながら、慎重に訓練を進めています」と加藤は話す。同院では医師、看護師、管理栄養士、リハビリスタッフなどが患者の状態や課題を共有できるカルテの共有シートを活用している。全スタッフが同じ情報を持ち、共通の目標に向けて支援することで、本当の意味で〈寄り添う医療〉が実現できている。また、院内には訪問診療、訪問看護、訪問リハビリ、地域包括支援センターが併設されており、在宅復帰後の支援まで一貫的に行える点も大きな強みだ。「高度急性期病院を退院しても、その先の医療や介護体制が整っていないければ、暮らしに戻ることはできません。医療と介護、ご家族と専門職をつなぐ病院として責任を果たしていくいたと考えています」(阿部)。この地域に、この病院があつてよかった。そう言われる存在であり続けるために、スタッフ一人ひとりの着実な取り組みが、今日も積み重ねられている。

CHAPTER 02 多職種が一致団結して、 患者にしつかり寄り添う。

ある時期のこと。それまでは杖や歩行器を使いながらも自分で移動できていたが、次第に右足へ力が入りにくくなり、転倒が増えている。異変を感じた家族が付き添つて、普段から通院していたみよし市民病院の内科を受診。転倒を繰り返すという訴えから脳疾患の可能性が疑われ、すぐに頭部CT検査が行われた。結果、頭蓋骨と脳のすき間に血腫(血の塊)が認められ、慢性硬膜下血腫と診断。治療を急ぐ必要があると判断した主治医は、連携先の豊田厚生病院へ受け入れを依頼し、Tさんは同日中に搬送、速やかに血腫除去の

Tさんに歩行障害が見られ始めたのはようになりました。ご自宅では環境が変わりますが、生活動作に必要な距離を歩けることを目標に進めています」と話す。その表情には、Tさんと向き合ってきた日々の積み重ねがにじんでいた。

Tさんに歩行障害が見られ始めたのはある時期のこと。それまでは杖や歩行器を使いながらも自分で移動できていたが、次第に右足へ力が入りにくくなり、転倒が増えている。異変を感じた家族が付き添つて、普段から通院していたみよし市民病院の内科を受診。転倒を繰り返すという訴えから脳疾患の可能性が疑われ、すぐに頭部CT検査が行われた。結果、頭蓋骨と脳のすき間に血腫(血の塊)が認められ、慢性硬膜下血腫と診断。治療を急ぐ必要があると判断した主治医は、連携先の豊田厚生病院へ受け入れを依頼し、Tさんは同日中に搬送、速やかに血腫除去の

CHAPTER 01 慢性硬膜下血腫の 手術後のリハビリ。

よく晴れたある日、みよし市民病院の病棟では、歩行器を使って歩行訓練に励む80代の男性患者(Tさん)の姿があった。「お疲れになつていませんか、もう少し歩けそうですか」。理学療法士の深谷好広が声をかけると、Tさんは前を見据え、ゆっくりと足を運ぶ。歩行訓練を始めて約1カ月。深谷は「最初は立ち上がるのも難しい状態でしたが、今では400メートルほど歩けます」と喜んでいた。

よく晴れたある日、みよし市民病院の病棟では、歩行器を使って歩行訓練に励む80代の男性患者(Tさん)の姿があった。「お疲れになつていませんか、もう少し歩けそうですか」。理学療法士の深谷好広が声をかけると、Tさんは前を見据え、ゆっくりと足を運ぶ。歩行訓練を始めて約1カ月。深谷は「最初は立ち上がるのも難しい状態でしたが、今では400メートルほど歩けます」と喜んでいた。

手術が実施された。

手術後は医師の管理のもとで意識状態も改善し、右足の感覚も徐々に戻るなど経過は良好だった。しかし、自力歩行には時間がかかると考えられ、家族は退院後

の介護や生活の見通しに大きな不安を抱えていた。「自宅に戻してあげたいが、今の状態では介護できるだろうか」。そんな不安に寄り添うように、病院側から「退院後はみよし市民病院でリハビリを続けませんか」と提案があり、家族はすぐに承諾した。

転院に向けて、両病院間では必要な情報共有や調整が迅速に行われ、みよし市民病院でも受け入れ準備が整えられた。そして約2週間後、Tさんは予定通り同院へ転院。こうして、手術後の経過を見ながら段階的に生活機能を取り戻すためのリハビリが始まったのである。

「この病院があつてよかった」 その信頼に応え続ける。

つなぐ医療 特集

高度急性期病院の治療を終えた患者を受け入れ、在宅までの道筋をサポートする。

COLUMN

● 議題は、リハビリの目標設定、在宅の介護環境の整備、退院後の医療やワーカー、理学療法士、作業療法士、地域包括支援センター職員、家族などが一堂に会する。

● 議題は、リハビリの目標設定、在宅の介護環境の整備、退院後の医療やワーカー、理学療法士、作業療法士、地域包括支援センター職員、家族などが一堂に会する。

キュア cure 病気の おはなし

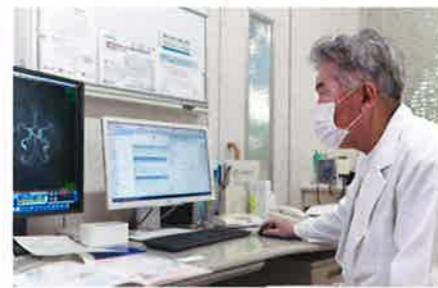


けがにより時間差で発症する高齢者に多い頭の病気。

慢性硬膜下血腫は、頭を打った後に脳を覆う硬膜と脳の間へ血液がゆっくり溜まっていく病気です。けがの直後には症状がほとんどなく、CT検査でも異常が映らないことがあります。2週間から3ヶ月の幅で、特に約2ヶ月後には現れやすいとされています。歩きづらさやぼんやりした様子、片側の手足に力が入りにくいなどの症状がみられ、加齢や認知症の進行と誤解されることもあります。転倒や軽い頭部打撲がきっかけになることが多いものの、受傷の記憶がない方でも血腫が見つかることがあります。「最近動きが変」「元気がない」など、日常の小さな変化があれば早めの受診が大切です。

治療は症状・血腫・圧迫の度合いで判断します。

治療は、血腫の大きさや脳の圧迫の程度、症状の有無を総合的に判断します。血腫が小さく、自覚症状がほとんどない場合は、経過観察を行い自然吸収を待つことがあります。一方、歩行障害や麻痺、頭痛、意識低下など、脳が圧迫されている兆候がみられる場合には、外科的治療が必要です。一般的な手術は「穿頭洗浄術」で、頭蓋骨に小さな穴を開けて血液を排出し、必要に応じて生理食塩水などで洗浄します。手術時間はおおむね30分程度で、局所麻酔で行えるため身体への負担は比較的少なく、多くの患者さんが術後に症状の改善を実感しています。術後は残った血液を排出するため、ドレーンという管を短期間留置し、再発予防に努めます。入院期間は1週間前後が目安で、退院後は数ヶ月かけてCT検査で血腫の縮小を確認します。再発率は10~20%とされているため、転倒予防や薬の管理が重要です。



Message

頭を打った後の変化を、家族も一緒に見守ることが大切です。



脳神経外科
立花栄二

慢性硬膜下血腫は、受傷直後ではなく時間がおいて症状が出ることが特徴です。ご本人が受傷の記憶を持っていないこともあるため、周囲の気づきが早期発見につながります。特に高齢の方は、普段の生活にわずかな変化があっても「年齢のせい」と思い込んでしまいがちです。歩き方が不安定になった、会話の様子がいつもと違う、食事量が減ったなど、日常

の小さな変化が大切なサインになります。また、脳梗塞や心疾患で血液をサラサラにする薬を服用中の方は、血腫ができやすく、再発のリスクも高まる場合があります。薬の中止や再開は必ず医師と相談し、ご本人だけで判断しないようにしましょう。気になる症状があれば、ためらわずに医療機関にご相談ください。



冬の心臓を守る習慣①

入浴前後の温度差に注意し、ゆっくり湯に浸かりましょう。

キュア cure リハビリテーション のおはなし



生活を再び築くための大切な一歩。リハビリテーションはその出発点となります。

早期離床を重視した多職種での支援体制。

頭部疾患には、脳卒中や慢性硬膜下血腫、頭部外傷などがあり、運動機能だけでなく、認知や言語、心理面まで広く影響を及ぼします。こうした疾患のリハビリテーションでは、「できるだけ早く体を起こす」ことが非常に重要です。これは、長期の臥床(ベッドや布団などに横たわっている状態)によって筋力や関節の可動域、認知機能、心肺機能が低下しやすくなり、生活の再構築に大きな障害となるからです。当院では、医師の判断のもと、リスク管理を徹底しつつ、可能な限り早期から離床を促し、日中の活動量を確保するよう努めています。さらに、多職種が、週1回の情報共有カンファレンスや支援会議を通じて、患者さんの状態や生活環境を細かく把握し、チームで支援方針を調整しています。

に応じて筋力強化やバランス訓練、関節の可動域訓練などを実施します。作業療法では、トイレや着替え、食事、掃除、洗濯といった日常生活の具体的な動作を練習し、認知機能や高次脳機能への支援も行います。加えて、その方の性格、生活背景、趣味や価値観に寄り添いながら、リハビリテーションの目標と一緒に設定していく姿勢を大切にしています。目指すのは、(本人が納得できるゴール)をともに見つけ、可能性を引き出すことです。



Message

「できる」を患者さんとともに見つけ、しっかり支えます。



右:深谷 好広(理学療法士)
左:加藤 美紗(作業療法士)



冬の心臓を守る習慣②

寒い朝は体を温めてから動き、急な負担を避けましょう。

リハビリテーションは、失った機能だけに目を向けるものではなく、「今できること」「これからできるようになること」を一緒に探し、人が再びその人らしく生活できるよう支える取り組みです。障害を受けたとともに、その人の人生は続いていきます。たとえ今は不安があっても、適切な支援や環境を整えることで、多くのことが再び可能になります。患者さんご本人の思いはもちろ

ん、ご家族の不安や疑問にも、私たちができる限り寄り添っていきたいと考えています。面会時にリハビリテーションの様子をご覧いただくことも歓迎ですし、小さな疑問でも遠慮なくご相談ください。「できない」と感じることの中にも、工夫や支援によって「できる」に変わることもあります。私たちは、その一歩と一緒に見つけ、支えています。

地域 医療 を 知ろう

今回のおはなし

医療機能 とは？



04 Our Partner

連携病院・診療所紹介

岡本乳腺外科・内科クリニック

乳がん検診から術後ケア、
生活習慣病まで安心の医療体制を提供します。

愛知県豊田市を中心とした豊田市に位置する岡本乳腺外科・内科クリニックは、乳腺専門医による乳がん検診や術後の経過観察を中心に、内科・外科の幅広い診療を行う地域密着型のクリニックです。

総合病院で数多くの乳がん手術や治療に携わってきた岡本喜一郎院長が、患者さん一人ひとりの悩みや不安に寄り添いながら、わかりやすく丁寧な説明と診療を大切にしています。

乳腺外科診療では女性スタッフの同席も可能で、男性の受診やお子様連れでの来院にも対応。近隣の基幹病院と連携した治療体制も整っています。加えて、高血圧・脂質異常症などの生活習慣病や、かぜ、発熱、予防接種にも対応しています。まずはお気軽にご相談ください。



岡本乳腺外科・内科クリニック
〒471-0865 愛知県豊田市松ヶ枝町2丁目55
豊田メディカルステーション1階
TEL 0565-85-7780
URL <https://www.okamoto-nyuusen.com/>



冬の心臓を守る習慣③

冬でもこまめな水分補給を忘れず、脱水を防ぎましょう。

TOPICS

X線骨密度測定装置で、骨の強度を検査できます。

当院では、新たにX線骨密度測定装置を導入しました。従来の「骨密度（骨の量）」測定に加えて、「骨質（骨の構造や強さ）」まで評価できるのが特長です。骨の強さは骨密度だけでは判断できず、骨質も大きく関与しているため、両方を測定することが骨折リスクの正確な把握につながります。新装置では、微量なX線を用いた短時間・低被ばくの検査が可能で、より安心して受けいただけます。また、解析ソフトを用いることで、骨の構造状態を数値化し、将来的な骨折のリスク評価にも活用できます。特に骨粗しう症や骨折の不安がある方は、一度相談してみませんか？検査や予約については、お気軽に整形外科のスタッフまでお声がけください。



当院に導入されている骨密度測定の特長

X線骨密度装置

骨密度を測定する機械。細く絞られた鋭角ファンビームによる測定で、誤差と被ばくの少ない骨密度測定をします。

海綿骨構造指標ソフトウェア

より正確な骨粗しう症診断のために、骨質を評価する機能を導入しました。



医療連携機関の先生方へ
MRI検査装置をバージョンアップしました。

当院ではこのたび、MRI検査装置のバージョンアップを行いました。主なポイントをご紹介します。

① 検査時間が短くなりました

画像処理にAIの技術を取り入れることで、撮影にかかる時間を短くできるようになりました。検査時間の短縮は、患者さんの身体的・心理的な負担の軽減につながります。また、画像処理の精度も向上し、診断の参考となる画像をより分かりやすく提供できるようになりました。



② 落ち着いて検査を受けられる環境に

照明や寝台の快適性を見直し、安心して検査を受けられる環境を整えました。リラックスして検査に臨めることは、安定した姿勢の保持につながり、検査の質を保つうえでも大切です。

③ 対応できる検査が広がりました

頭部・腹部・背骨・関節など、さまざまな部位の検査に対応しやすくなりました。症状や目的に応じた検査が行いやすくなっています。

当院では今後も、地域の医療機関と連携しながら、安心して検査を受けていただける体制づくりに努めてまいります。検査内容や撮像条件など、ご不明な点がございましたらお気軽にお問い合わせください。



冬の心臓を守る習慣④

無理な運動は控えて、体調に合わせた動きを心がけましょう。